

日本のライティングセンター調査

—日本人のための英語ライティングセンター構築の可能性*—

A Survey of Writing Centers in Japan

— Toward the Construction of An English Writing Center for Japanese Students —

木村友保 佐藤雄大 ムーディ美穂
鈴木稔子 小島由美

Tomoyasu Kimura, Takehiro Sato, Moody Miho,
Toshiko Suzuki, Yumi Kojima

1. 英語ライティングセンターを巡る日本の状況

日本の英語学習者にとって英語学習の目的は様々であるが、ピーター・ミルワードの言葉を借りれば「自分の本当に言いたいことを表現するために良い英語が書けるようになる」(Milward, 1986)ことは、重要な目標の一つであると考えられている。そして、一人でも多くの学生に「自分の本当に言いたいことを表現するために良い英語が書ける」ようになってもらうために、教育現場では学習者に英語で書く機会を多く持たせることが期待されている。

しかし、「英語で書く」ということに関して、中学、高等学校の中等教育機関では、ほとんど英語ライティングが指導されておらず(宮田, 2002)、また大学など高等教育機関でも、様々な要因から英語ライティングの授業が避けられているのが事実である。例えば、「対象学生数が多い」などの学習環境面であったり、そもそも英語ライティングの指導は「英語のネイティブ・スピーカーしか教えられない」と考えられる傾向があるのも一つの原因となっている。この点について、北米で第二言語ライティングの研究・実践を行っている Paul Kei Matsuda は、海外と日本のライティング教育状況を比較し、日本で英語ライティング教育の障害となっていると考えられている要因は、

*平成24年度採択の科学研究費助成事業基盤研究 (C) (課題番号24520717) の課題名

日本独特のものではなく、北米でも同様だと分析している (Matsuda, 2011)。ただし、このような状況の北米において第二言語・外国語としての英語ライティングは、日本とは違い、高等教育機関では、第二言語使用の学生や留学生に対しても、レポートを始め、書くことが頻繁に要求され、ライティングが教育の中心に位置づけられている (吉原, 2004)。

Matsuda が指摘するように、日本と北米のライティングに関する諸要因に違いがないのに、北米でライティング活動が活発に行われている背景には、1970代半ば以降北米の高等教育機関で盛んになった「カリキュラム全体でライティングの指導に取り組んでいく」(Writing across the curriculum、以下 WAC) という動きがあるからである。この WAC とは、「初年時から最終学年まで、また文章表現科目だけではなく、どの科目においてもライティングの指導を取り入れ、カリキュラム全体で学生の書く力が上達するように支援しようとする」大学全体の働きかけで、こういった教育的動きが北米での学問機関でライティングを重視し、支援しようとする素地になったと考えられる (井下2008)。そしてそうした大学全体の取り組みを実現するため、学部、科目に制限されずに学生のライティング支援をする機関として「ライティングセンター」が多くの大学に設立されていき、学生へのライティング支援活動が具体化されていることが、日本と比較して、着目すべき違いであると指摘できる。

日本でも、近年の高等教育機関の学力問題から WAC は注目され、特に各学部・学科で得た学生の「知識」を「書く」という経験を通して「考え」、「再構築」していくことで初めて生きた知識にすることができるため、日本の大学において WAC を進める必要性が主張され (井下, 2010)、そうしたライティング力を支援するためにライティングセンターへの関心が近年高まってきている (吉田, Johnston, & Cornwell, 2010; 松田, 2011; 佐渡島, 2009)。

ライティングセンターは北米においては歴史が古く1930年代頃から、その原型となるものが存在していた (Williams & Severio, 2004)。1950年代頃から北米の大学にその設置が広がりはじめ、前述の WAC 運動とともに1980年

以降のライティング指導法におけるプロセスアプローチ運動も加わり（佐藤, 2012a）、ライティングセンターにおけるチュートリアル的重要性が認識され、現在、北米ではほとんどの大学にライティングセンターが設置されている（佐渡島, 2009）。そしてそのライティングセンターでは第二言語・外国語としての英語ライティングも対象とし、母語ライティング支援とは違った側面があることも研究が進められてきている（Williams & Severio, 2004, Thonus, 2004）

2. 「日本人のための英語ライティングセンター構築の可能性とその実現計画」研究プロジェクトと本研究の概要

以上概観してきたように、第二言語・外国語としての英語ライティングを巡り、北米と日本では、阻害する要因に差がない状況ではあったが、高等教育機関におけるライティングに対する取り組み方には大きな差があり、その一つにライティング支援機関であるライティングセンターの有無があった。日本でも近年ライティングセンターが設置されることが増えてきたが、日本の大学生に外国語としての英語ライティングを指導するライティングセンターはまだ数が限られている（大阪女学院大学、東京大学、早稲田大学、上智大学、秋田国際教養大学、名古屋大学など）。「英語で書く」、そして「思考と結びつける」という点で、WAC 運動とその具体的な支援機関であるライティングセンターは、英語ライティング力向上に大きな可能性を秘めている。

私たち、大学英語教育学会（JACET）中部支部ライティング研究会のメンバーは、日本の高等教育機関で英語ライティング教育の質を高めていく上で、このライティングセンターの役割を把握し、日本の大学生に活用できる可能性を探ることが急務であると考え、2012年度より科学研究費の助成を受けて、「日本人のための英語ライティングセンター構築の可能性とその実現計画」研究（Constructing an English Writing Center for Japanese Students, 以下 EWCJ プロジェクト：課題番号24520717）に取り組み始めた。EWCJ プロジェクトでは、国内外のライティングセンターの現状を調査すると同時に

日本人の英語教員によるライティング指導を研究し、ライティングセンター構想の具体案を考えることを目標としている。EWCJ プロジェクトでは具体的に以下の三つの調査研究をする計画となっている。

1) 「ライティングセンター」の実情

国内外のライティングセンターに直接訪問し、ライティングセンターの開設時期、対象者、利用実態などの実情を、インタビューを中心に調査する。この調査によって現在のライティングセンターの実情を報告したい。

2) 「ライティングセンター」の理念

ライティングセンターが、どのような歴史的背景・理論的背景から生まれたのかなど、文献を中心に調査する。このような調査を通じて、日本人のための「ライティングセンター」の理念を提示したい。

3) 「ライティングセンター」の対象

EWCJ プロジェクトでは、「日本人のための英語ライティングセンターの構築」を目指しているが、ライティングセンターの支援がどこまで可能なのかということも見極めたい。英語ライティング指導の対象者というと漠然と大学生をイメージする 경우가多いが、その大学生でも、「英語のライティング」と聞くだけで拒否反応を起こす学生がいて（佐藤，2012b）、その習熟度の幅はかなり広い。一方、実は大学生だけではなく、木村（2012）が2009年度からの3年間の基盤研究C（課題番号21520605）でその対象とした現職教育の高等学校教員も、ライティング支援の対象者であり、潜在的にどこまでを対象者としなければならないかは、確定したものがないのが実情である。そのため、私たちがそれぞれの立場で、広範囲の専門分野で英語のライティングを教えることで、「ライティングセンター」の対象とする英語学習者を明確にしたい。

以上が、EWCJ プロジェクトの基本的な計画である。2012年4月から、ライティングセンターの文献研究をはじめ、並行して国内外のライティングセンター訪問の準備を開始した。そして、2012年8月～9月にかけて国内外の大学ライティングセンターに直接訪問して、センター長（ディレクター）にイン

タビューし、その理念、運営方法、問題点などを調査した。本研究では、国内のライティングセンターとして大阪女学院大学、東京大学、津田塾大学、政策研究大学院大学、国外の大学としてインディアナポリス大学への訪問調査の結果を報告する。

3. 調査方法

ライティングセンター訪問は、以下のような手順で準備、実施した。

1. 2012年4月からはじめた文献研究に基づいて、研究会メンバーで訪問先の候補を挙げ、依頼先を決定した。
2. 訪問依頼するため、まずホームページなどでライティングセンターの連絡先を確認し、電話にて研究の趣旨を説明し、訪問させていただけるかを確認した。その場で了承していただいたセンターにあらためて研究趣旨と訪問依頼の文書を郵送し、その後メールなどで具体的な日時を決定し、訪問を実施した。
3. 最終的に訪問したのは、以下の10大学となった（訪問順）。

国内：大阪女学院大学（大阪市）、東京大学（東京都）、上智大学（東京都）、政策研究大学院大学（東京都）、津田塾大学（東京都）、早稲田大学（東京都）、国際教養大学（秋田県）

国外：Marian University (Indianapolis, IN, U.S.), University of Indianapolis (Indianapolis, IN, U.S.), Pace University (New York, NY, U.S.)

4. センター訪問にあたって、あらかじめインタビューする内容を決め、その内容に従いつつも当日の状況に従ってインタビューを進める半構造化面接法でインタビューを実施した（鈴木，2005）。インタビューの内容は、後日書き起こしするためICレコーダで録音し、センターの様子などはデジタルカメラで写真撮影を行った。また、これらの記録内容に関しては、承諾書を事前に準備し、インタビュー当日までにメールで送付し、先方に確認をしておいていただき、当日承諾書に署名していただき、

記録利用についての承諾を得てある。

4. 国内大学ライティングセンター

本節では、国内で訪問したライティングセンターのうち大阪女学院大学、東京大学、津田塾大学、政策研究大学院大学のライティングセンターの概要と特色を報告していきたい。

4.1 大阪女学院大学：四年間のカリキュラムの中に英語ライティングが位置づけられている事例

大阪女学院大学（大阪府大阪市）は、国際・英語学部国際・英語学科に「国際コミュニケーション」「国際関係」「国際ビジネス」の三つの専攻を持つ英語教育が中心の大学で、2004年に英語のライティングセンターを設立し、早稲田大学とともに日本における最初期から運営されているライティングセンターの一つである。また日本のライティングセンター研究にも早くから取り組み、2007年から2009年に科研費補助を受け、「大学ライティングセンターの構築と運営に関する研究-EFLの視点から」の調査研究を行い、本研究もいろいろ参考にさせていただいた。

大阪女学院大学の the Writing Center は、学生サポート部が運営する Self-Access Study Support Center（「自主学習支援センター」、以下 SASSC）に、Tutoring（卒業生・大学院生によるチュータリング）、English Speaking Lounge（留学生との英語ラウンジ）とともに開設されていて、木曜日を除く月曜から金曜の4時半から7時半まで、土曜日は1時半から4時半までオープンし、ネイティブの教員が対応している。相談時間は、15分で、学生が、ライティングセンターに来て、受付簿に予約をする形態で運営されている。オンラインで予約をすることはしていない。ライティングセンターの指導方法は、学生が書いてきた英文を読み、基本的に校正は行わず、学生がより良い英文が書けるように指導するようにしているということであった。またネイティブの教員を相手では、心理的負担が大きいという学生のためは、

Tutoring の卒業生・大学院生が相談にのることができるようにもしている。

このセンターは、学部には所属するのではなく、大学全体を対象とする SASSC が運営しているため、学生はだれでも利用することができ、併設されている短期大学の学生も利用できる。学生は、国際・英語学部なので、英語によるプレゼンテーションやエッセイライティングがさまざまな授業で必要となってくるため、センターに来る学生は、授業に関連した英文が多く、それと関連して、学生の来訪者数も年度初めと学期終わりに増える傾向がある。

大阪女学院大学はカリキュラムとして Peace and Conflict, Values and Ethics, Human Rights, Sustainable Future という四つのテーマで教育が行われ、4年間にわたって、英語ライティングが奨励されている。さらに、4年生では卒業研究を英語の論文として書くことになっていて、それは論文集として図書館に保存されている。こういった大学4年間のカリキュラムで英語ライティングが重要な活動として位置づけられ、そのライティング支援をライティングセンターが行っているのは、はじめに述べた WAC とライティングセンターの共同支援の教育の一実践例であり、とても示唆に富む教育カリキュラムであると感じた。

4.2 東京大学：理系学部1年のみを対象とした事例

東京大学のライティングセンターは、「駒場ライターズ・スタジオ」（以下、KWS）という名称で、教養学部のある駒場地区キャンパス（東京都目黒区）に設置されている。KWS は、2008年4月に教養学部附属教養教育高度化機構が推進する ALESS（Active Learning of English for Science Students、「理系生のためのアカデミック・ライティング・コース」）のサポートを行う部門として設立された（2012年5月からグローバルコミュニケーション研究センターの所属となっている）。ALESS は「世界に発信されている科学論文の95%が英語である」という認識のもと、理系学生が英語論文執筆を1年生からトレーニングしていくことが目的で、教養部理系1年生で1学期間の必修科目

で、夏学期・冬学期それぞれ1000人程度が受講している。ALESS の授業では、学生には以下のことが期待されている。

- 1) 科学論文の論理的構造の理解と論文作法の習得
- 2) 個人あるいはグループで考案した実験に基づく科学論文の執筆・IMRAD (Introduction, Methods, Results, Discussion) の練習
- 3) フォーマルな言語と語彙の使用法

この ALESS のライティング授業を支援する活動として KWS は重要な役割を果たしている。

KWS は、月曜日から金曜日までの12時10分～16時20分までオープンしており、アカデミックライティング教授法の指導を受けた大学院生が、ティーチング・アシスタント (TA) として常駐している。一回のチュートリアルは40分間で、学生はあらかじめ ALESS 運営のサイトからオンライン予約をして、来室する。

チュートリアルの対象学生は、ALESS 受講者に限定し、基本的には日本語でチュートリアルを行っている。ただし、TA は母語が英語ではなくても話すこと、書くことに関して高度な英語力を持っているため、英語でのチュートリアルも学生が希望する場合は、実施している。このチュートリアルは、1学期に200回以上行われ、繁忙期には週30回以上のチュートリアルも行われている。

チュートリアルの方針は、英語の添削は行わず、理系学生の科学論文であるため、実験が基本にあり、そこで求められる「明瞭さ (clarity)」と「正確さ (accuracy)」をもとに研究内容が論文を通して伝わっているかどうかを最も重視している。具体的には、相談に来る学生が書いてきた「文章」をその人に音読させて、おかしい所があれば、そこを再度読ませて、「それでいいかどうか」確かめさせることが多く、このやり方で、書いた本人がおかしな点に気づき、その直し方を学んでいくケースも多い。

東京大学の KWS の特色は、理系学生を対象とし、学術論文作成に特化したプログラムの支援であり、前述した IMRAD 形式でどれだけ明確に論文を

書けるかに絞っている点である。また、ALESS で作成する論文は、実際の実験に基づいて作成されるため、その実験指導をする理系大学院生の TA が1, 2名配置されているということも他の組織にはない特色となっている。このような目的、組織のライティングセンターは、他に例がないので、これからどのように展開されていくかにとっても関心を持った。その点について、KWS ディレクターの片山晶子先生に伺ったところ、現在までは ALESS の学生を対象としているということで、理系の学生のみであったが、文系の学生の指導にも KWS として関心があり、その準備をしていきたいという話であった。

4.3 津田塾大学：日本語ライティングセンターの事例

津田塾大学（東京都小平市）のライティングセンターは日本語文章の指導のみで、2008年11月に、文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム」（教育GP）で採択された「社会貢献は書く力とプロジェクト推進力から」という取り組みの一環として設立され、大学全体の支援施設として運営されている。

ライティングセンターは、火曜日、水曜日、金曜日に午前9時45分から午後4時15分までオープンし、1回のセッションを45分単位、1日8コマで対応している。学生は前日午後4時までにウェブフォームで予約しておくことになっている。相談できる対象は日本語の文章のみで、指導にあたっては、

- ①教員1名と博士課程の大学院生のチューター3名（博士課程の大学院生2名、ポストドクター1名）が「読み手」として相談にあたる。
- ②添削指導は行わず、学生の「気づき」を促すような関わり方をする。
- ③教員やチューターはヒントを与えたり解決方法をともに話し合ったりするが、直接学生が書いたものを改訂することはない。

という3点を重視して、学生の書く力の養成を通して、正課科目を側面からサポートすることを目指している。

相談に来た学生との関わりは、センターは添削したり点数をつけたり答えを教えたりする場ではないことをきちんと伝えることから始まり、チュー

ターと共にセッションの目的とゴールを確認し、共有する。あくまでも学生が主体的に自分の相談内容を説明することに重きを置いている。相談できるものはアカデミックライティングの領域に限らず、手紙や礼状、サークル関連の文章、エントリーシート、コースや留学等志望理由書と幅広い。就職関連の相談は教員のみが対応する。相談に訪れた学生は、毎回セッション後にアンケートに答えることになっている。

センターが始まった当初は来談者が少なかったが、授業の中で教員がライティングセンターについて紹介するようになって増え、学生の口コミによる影響も大きいという話だった。2009年度からは新入生のオリエンテーションで紹介している。年間でみると、7月、10月、12月の利用が多いようである。

指導方法に関しては、「マイ・ライティング・ポッド」というウェブ上に、ライティングセンター教員とチューターのみ閲覧可能なコミュニティがあり、そこに毎回、相談報告書を保存している。チューターミーティング(月1回開催)の議事録や、対応が難しかった相談に関するコメント、アドバイスなども書き込み、直接担当していない相談に関する情報も全員で共有するシステムになっている。また、報告書と来談者が持参した文章は紙媒体でも残し、ライティングセンターで保管している。教員とチューターは直接それを手にとって閲覧することもできる。

ディレクターの大原先生によると、学生が、教員やチューターから「なぜ(こう書いているのか)」と問われることに慣れていないようで、「なぜ」と問われると間違えているのだと誤解することがあるということだった。また、中学・高等学校時代に「文章力がない」と言われ、苦手意識を持っている学生もいるということだった。このような学生に、「書く」ということをもっと楽しんで欲しいと感じるのと同時に、手軽なマニュアルは無いということを理解して、自分の頭で考える体験を通して、その先へ行ってみて欲しい、と話されていた。

4.4 政策研究大学院大学：留学大学院生のみを対象としたアカデミックライティングの事例

政策研究大学院大学（東京都港区）は、1997年に世界中から未来の政策リーダーや研究者が集まる国際的な政策研究の拠点として国立大学として設立された大学院大学である。秋学期から始まる1年間の修士コースが中心の大学院大学で、奨学金の違いで以下のコースが開講されている。

- ・ Young Leaders Program
- ・ Public Policy Program
- ・ Public Finance Program
- ・ Economics, Planning and Public Policy Program
- ・ Macroeconomics Policy Program

この修士コースには日本人は在籍しておらず（日本人学生は違うカテゴリーのコース）、学生は多様な国から入学してくる。また各プログラムで入学基準も異なっているため、TOEFL のスコアは提出しなければならないが、英語習熟度の幅も広いということだった。

ライティングセンターは2005年に開設され、開設後間もなくディレクターに着いた Katerina Petchko 准教授が現在まで継続してディレクターとしてライティングセンターを運営し、私たちのインタビューにも応じてくれた。

この大学院には、ヨーロッパからの留学生も多く、英語に関してネイティブ並みの学生が多いが、Petchko 先生によるとほとんどの学生は、アカデミックライティングの書き方は学んできていないのが現状であるということだった。そのため、学生が入学時点でどの程度アカデミックに英文を書くことができるか、ということを知るためのライティングタスクを現在開発しているということだった。以前、TOEFL のライティングタスクを、実施したことはあったが、TOEFL のタスクが一般的な内容であるため、どの学生も何らかの内容を書くことはできたが、それらがアカデミックライティングと相関性をもっていなかったということであったため、独自に開発しているということであった。

政策研究大学院大学のライティングセンターの指導方法は、他の大学のライティングセンターと異なり、大学院生中心のチューターが学生のライティング指導をするという形態とはらず、Petchko 先生を含め3名の教員が学生のライティング指導に当たるという形態をとっている。これは、ディレクターの Petchko 先生が大学院生によるチュータリングに対して懐疑的であるためであった。そのため、他大学で行われているようにアポイントを取らずに気軽にセンターに訪れ、チューターに相談するということも行わず、必ず事前にメールで原稿を送付し、アポイントを取るという形で予定を組むシステムで運営されている。

一年間の修士コースの最後に提出する研究論文をサポートするのがライティングセンターとして主要な活動であり、12月に学生が各コースに提出する「研究計画書」（実質 A4用紙1ページ程度）は必ずライティングセンターに提出させて、全員の計画書を見て、指導することにしているということだった。最終的な研究論文は、シングルスペースで20～30ページのもので、それらの持ち込みは任意だが、そうした草稿段階の原稿は、引用が多く、文献も明示されていないものも多いのが実情であるため、アカデミックライティングとして守らなければいけない基本的なルールの指導が中心となっていた。また研究論文の草稿を読むだけでも時間がかかり、毎年6、7月はかなり忙しくなるということだった。その他ライティングセンターでは、随意科目としてライティングコースの授業やワークショップを開催していた。

政策研究大学院大学におけるライティングセンターについて、Petchko 先生は大学側から厚い支援を受けているので、組織的な問題は感じないが、一年のコースでは専門の授業が忙しく、学生がアカデミックライティングを十分身につけるには短すぎることに問題点を感じていた。つまり、語学力、アカデミックライティング力は、自然に身につくものではなく、努力が必要であると痛感しているということだった。

5. 国外大学ライティングセンター

本節では、米国で訪問した University of Indianapolis（インディアナポリス大学）のライティングラボの概要と特色を報告したい。

インディアナポリス大学は、インディアナ州都のインディアナポリスの中心部から15分ほど離れた住宅街にある大学で、1902年創立のキリスト教系の四年制私立総合大学である。文系、理系の学部があり、少人数制をアピールする中規模大学（学部生約3000人、大学院生3800人）で、キャンパスはとてもきれいな大学だった。

このライティングラボは、他の北米の大学でよくあるように図書館（クラナート記念図書館）内にあり、事前にEメールでインタビューをお願いしていたライティングラボラディレクターの Richard Marshall 先生と Dawn Hershberger 副ディレクターがラボ内で対応してくれた。

インディアナポリス大学のライティングラボは、1983年に設立され、設立当初から Marshall 先生がディレクターを務め、1989年から Hershberger さんが加わり、以来現在まで二人で運営を行っている。このラボは、どこかの学部には所属するのではなく、教育担当の副学長直属の組織であった。ラボは、月曜日～金曜日までは朝9時～午後5時まで、日曜日は午後3時～5時までオープンし、チュータリングセッションは、直接ラボに来るか、事前にラボに来て、アポイントを取るという形で行われている。2012年9月からウェブ上でアポイントをとれるシステムを導入したので、ちょうど訪問した時にその新しいアポイントシステムの話をしているときだった。

チューターは、現在学部生中心に40名ほどが登録していて、いろいろな学部の学生が対応できるようにしている。大学院生が中心ではなく、学部生中心というところで、適任の学部生を探すのは難しいのではないかと質問したところ、高校での成績なども参考にするし、特に各学部からの推薦を重視して人選するというので、今まで問題なく運営してきているということだった。実際、訪問当日、社会学系学部と看護学部系学部の学生がチューターとして勤務していた。セッションの時間に取り決めるはないが、平均して30分

ぐらいのセッションが多く、再訪問指導についても制限回数はないということだった。

指導方針は、作文それ自体を添削するのではなく、書き手がより良い作文ができるように指導するというものだが、多くの場合、学生が、ライティング課題が何を求めているかを理解していないので、チューターと一緒に課題を理解することから始めるということだった。実際書いた文章を学生とチューターが読み、そこでわかった整合性のない箇所や、明確さがない箇所を修正して、再度来室するように指導することも多いということだった。しかし多くの学生や一部の教員は、ライティングラボを文法や綴り間違いなどを点検修正してくれる場所だと考え、作文を持ってきたら、完全な原稿にして返してくれると考えているので、ライティングラボの上記のような対応に戸惑いを表すことが多く、こういった誤解を解くのも仕事の一つだと考えていると話していた。そのためによく一年生の学期のはじめにいろいろな教室に訪れ、ライティングラボの宣伝をしつつ、ライティングの指導方針も説明するようにしているということだった。

1年生にどのように対応するかということに何回も Marshall 先生が触れていたのも、高等学校でのライティング教育について聞いたところ、ライティングにはいくつものステップがあり、複数回書き直しが必要だということを恐らく高等学校でも学生は教えられているとは思いますが、高等学校教員も忙しく、個々の学生に対応するのが難しいので、新入生でそういったライティングに対する意識は定着していない。また高等学校にもそうした状況を補うためライティングセンターが設置されているところもあるということだった。

6. ライティングセンター訪問で見えてきたこと

以上 EWCJ プロジェクトで訪問インタビューしたライティングセンターから、それぞれ特色が異なるセンターの報告を行った。四年間のカリキュラムの中に英語ライティングが位置づけられた事例（大阪女学院大学）、一学期のみ、理系学部のみを対象とした事例（東京大学）、日本語ライティングセ

ンターの事例(津田塾大学)、留学生のみを対象とした大学院でのアカデミックライティングの事例(政策研究大学院大学)、そして米国の一般的な大学における事例(インディアナポリス大学)であった。それぞれ対象とする学生層が違い、またライティングセンターにおける指導形態も異なっていたが、どのライティングセンターにも共通したこととして、学生の作品を添削することではなく、書き手である学生自身を良い書き手に成長させることがライティングセンターの役割であると考えていることである。日本におけるライティングセンターは、2004年以降に設立されており、まだ10年の歴史はないが、今回米国でお話を伺ったインディアナポリス大学の Marshall 先生はライティングラボが1983年に設立してから30年間ディレクターとして務められている経験があるが、彼もインタビュー中何回も書き手を育てることを強調され、他のライティングセンターでも同じだと言われていた。こういったディレクターたちの経験知は、学生は、「良い書き手として成長することができる」という事例をたくさん経験してきたと言い換えることもできる。そしてそれははじめ井下(2008)を引用したように、ライティングセンターでのセッションを繰り返すことによって、学生が「思考を深め」、その結果ライティング内容がより良いものへと変化していくということでもあるだろう。

7. ライティングセンター研究の課題

しかし、ライティングで「学生が成長する」とはどういうことか、また「ライティング」と「思考」が結びつき、ライティング教育を通して「思考を深める」ということはどういう事態を想定しているのか。今まで報告してきたようにライティングセンターのディレクターらが共通に考えているライティングセンターの理念がどのように説明できるかという理論面について、未だ研究は深められていない。私たちの EWCJ プロジェクトは、はじめにも触れたように、ライティングセンターの理論面にも踏み込んで考えたいと文献調査も同時に行っている。その中で、言語と思考の関係について相互作用から考察したヴィゴツキーの考察(ヴィゴツキー, 2001)は、示唆に富み、ライ

ティングセンター研究において深めていかなければならないと考える。ヴィゴツキーは、「最近接発達の領域」(Zone of Proximal Development; ZPD)で有名であるが、彼の主著『思考と言語』でこのZPDが語られる際に、言葉と思考が結びつく例として「ライティング」が例として取り上げられていることは、あまり知られていない。彼は書き言葉と話し言葉の発達は全く別物であることを述べた後、音声の助けのない書き言葉は、抽象的であり、子どもにとって不慣れなものであるが、そうした抽象的言語に取り組むことによって「以前に形成された話し言葉の心理的体系を改造する」(p. 287)と指摘し、以下のように書き言葉の特色を指摘している。

「その第一の特質は、書きことばのなかで子どもは有意的(随意的)に行動しなければならないこと、書きことばは話し言葉よりも有意的であることにある。・・・書きことばは、最大限に展開された、形式的には話しことば以上に完全なことばである」(pp. 288-289)

この「有意的・随意的」というのは「自由に」とも言い換えることができ、ヴィゴツキーは概念を、無自覚に利用するのではなく、自由に操作できるようになることを「学的」と考え、「書く」という行為が心理的体系を改造していくと考察している。ヴィゴツキーのこの概念を随意的に使用することと教養教育との関係を論じた論文も出てきていることから(田島, 2009)こうした心理的(あるいは認知的)な考察で、ライティングセンターで目指している「ライティングで思考を深める」ということをより明確にすることができればと考えている。

8. まとめ

以上、本研究では、ライティングセンターの概要、日本と米国のライティングセンター訪問調査の報告、理論的研究の課題について述べてきた。日本ではまだ設置されている大学数は少ないが、訪問したライティングセンター

では、それぞれ熱心に学生ライティング支援に取り組み、どのライティングセンターもこれからもっと支援活動を活発にしていきたいという意気込みが感じられた。また30年以上の歴史がある北米のライティングセンターにおいても、Marshall 先生が話されていたように、ライティングを通して学生が育っていくことに対して、まだ理解が深まっていない現状を考えると、日本のライティングセンターがこれからいろいろな局面を迎えると考えられる。そのためにも、「ライティングセンター研究の課題」で触れたように、理論的にライティングセンター実践を深める必要があると言える。

参考文献

- 井下千以子. (2008). 『大学における書く力考える力: 認知心理学の知見をもとに』. 東京: 東信堂.
- 井下千以子. (2010). 「学士課程カリキュラムマップに見る「学びの転換」と「学びの展開」東北大学高等教育開発推進センター『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』、東北大学出版会.
- 木村友保. (2012). 『外国語教員10年目研修制度の研究と分析－教員免許更新制度導入に向けて－』. 平成21年度～平成23年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究成果報告書.
- Matsuda, P. K. (2011). “Can Japanese College Students Learn to Write in English?” *JACET International Convention*, Seinan University (2nd September, Invited Lecture).
- 松田佳子 (2011). 「金沢大学における留学生を対象としたライティング支援体制づくりに向けて」. *Forum of Language Instructors*, 5, 27-44.
- Milward, P. (1986). *Creative English*. Tokyo: Kenkyusha.
- 宮田学 (編). (2002). 『ここまで通じる日本人英語－新しいライティングのすすめ』. 東京: 大修館書店.
- 佐渡島紗織. (2009). 「自立した書き手を育てる: 対話による書き直し」. 『国語科教育』, 66, 11-18.
- 佐藤雄大. (2012a). 『ライティング・プロダクト分析を中心としたダイアログ・ジャーナル・ライティング研究』. 博士論文: 名古屋大学.
- 佐藤雄大. (2012b). 「学生の成長に伴う「楽しさ」－反射的楽しさと社会的楽しさ－」. 『新英語教育』 6号 (16-18).

- 鈴木淳子. (2005). 『調査的面接の技法』. 京都：ナカニシヤ出版.
- 田島充士. (2009). 「教職課程教育における学校インターンシップの可能性－ヴィゴツキーの「自覚性」概念を軸に」. 『高知工科大学紀要』, 6, 215-224.
- Thonus, T. (2004). What are the differences? Tutor interactions with first- and second-language writers. *Journal of Second Language Writing*, 13, 227-242.
- ヴィゴツキー, L. S. 柴田義松 (訳) (2001). 『思考と言語』. 東京：新読書社.
- Williams, J. & Severio, C. (2004). The writing center and second language writers. *Journal of Second Language Writing*, 13, 165-172.
- 吉田弘子, Johnston, S., & Cornwell, S. (2010). 「大学ライティングセンターに関する考察－その役割と目的」. 『大阪経大論集』, 61, 99-109.
- 吉原真理. (2004). 『アメリカの大学院で成功する方法』 東京：中央公論新社.